賊星《ナガレボシ》

吾妻栄子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
賊星（ナガレボシ）

【Ｎコード】
Ｎ００２８Ｚ

【作者名】
吾妻栄子

【あらすじ】
タイトルは中国語の俗語で「流れ星」の意味です。
華やかだった１９３０年代の上海を舞台に、
行商をする貧しい母子の悲劇を描きます。
＊他サイトでも発表した作品です。

柄杓星《ひしゃくぼし》

「母ちゃん、見て！」

少年は大きな目をパッと輝かせると、煤けた小さな手で北の空を指差した。

「流れ星だよ！」

白い八重歯を覗かせた、浅黒い顔いっぱいに笑いが広がる。
今年七つになるこの子の本名は「宏生（ホンション）」だが、
浅黒い顔といい、吊り上がった大きな目といい、八重歯といい、
子ガラスそっくりな風貌をしているため、知る人からは専ら「鴉児（ヤール）」
と呼ばれている。

「どこ？」

母親は安パーマの緩んだ、しかし豊かで艶のある黒髪を揺らすと、
幼い息子の示す方角を窺った。

「ああ、もう消えちゃった。」

鴉児は舌打ちする。

「どうして、すぐ消えちゃうのかな？」

母親は腕に提げた花籠を持ち直すと、白玉（はくぎょく）じみた蒼白い顔に
ふっと微笑を浮かべた。

「宏生（ホンション）、それは、お星様だからよ。」

母親だけは、少年を本当の名で呼ぶ。

柄杓星《ひしゃくぼし》

「消えないお星様だっていっぱいあるよ」

鴉児は小さな口を尖らせた。

「あの柄杓星(ひしゃくぼし)はいつだって北の空に見えるし」

言いながら、鴉児は諦めきれずに北斗七星に目を凝らす。
さっき見た星は、あの柄杓(ひしゃく)の、ちょうど柄の真ん中を切るようにして流れたのだ。

「すぐ消えるから、流れ星なのよ」

諦めなさい、という風に母親はひっそりした声で告げると、少年の手を引いた。
母親の手から伝わる温みに、鴉児は自分の指先が冷え切っていたことに気付く。

「今日は寒いから、早くご飯買って帰りましょうね」
「うん」

鴉児は母親の手を握り返して、こくりと頷いた。

本当は、今日「は」じゃなくて、今日「も」寒いんだ。
多分、明日(あした)も、明後日(あさって)も…。

「早くあったかくなるといいね。」

口に出すと、余計に暖かい日が遠くなる気がして少年は微かに身を震わせる。

「すぐに、春になるわ。」

信じなさい、と言い聞かせる声で母親は答えると、小さな手を握る力を強めた。

早く春が来るよう流れ星にお願いしたい気持ちで、鴉児はまた北斗七星を見上げる。

それは、まるで北の空に浮かぶ、氷で出来た巨大な柄杓の様に映った。

もしかすると、夜にいつも見える星は凍っていて、
流れ星はあったかいお湯で出来ているから、
すぐ空の上を流れていって見えなくなってしまうのかもしれない。

夜市《よいち》

「粽子(ちまき)を六個」

屋台の喧騒の中から、すぐ前に立つ母親の声が鴉児の耳を捉える。

やっぱり、今日も六個だ。

鴉児は肩を落として、手に持った花籠を見やる。

萎(しな)びて本来の緋色から黒っぽく変色した薔薇が、籠の半分以上を埋めている。

まだ生乾きの薔薇の、むせ返る様な芳香が

少年の鼻先よりやや上にぶら下げられた母親の花籠からも漂ってくる。

母ちゃんの籠にも花がいっぱい売れ残ってるんだ。

どれだけ余っているのか、鴉児は背伸びして覗く気にもなれなかった。

籠の八割以上花が売れた日は十個、六割ぐらい捌(は)けた日は八個、

そうでない日は六個だけ母ちゃんはいつも夕飯に粽子を買う。

いつも花を売りに行く公園の木が葉を落とし、散歩する人が少なくなってからといもの、

ずっと晩飯は六個の日が続いている。

「行くわよ」

人混みの中、母親に手を引かれながら、鴉児は腹を擦って空を見上げた。

今度、流れ星を見たら、毎晩粽子が十個買える様にお願いしよう。

夜市《よいち》

「はい、焼餅（シャオピン）、焼餅、焼き立てアツアツの焼餅はいかが？」

売り子の声と共に、温かで香ばしい匂いが鼻孔を衝く。

やっぱり、焼餅もお願いしよう。

鴉児は思い直す。

母ちゃんは、粽（ちまき）子の方が腹持ちするからと言うけれど、
おれはこんがり焼けた餅の方が、本当はずっと好きなんだ。

「蜜たっぷりの山査子（サンザシ）だよー！」

流れてきた甘酸っぱい香りに、今度は涎が出る。

山査子もいいな。

九月の重陽節（ちょうようせつ）の頃、母ちゃんとお祭りの屋台で一本買って、
半分こして食べたきりだ。

食べて噛みしめたあの味は、匂いよりもずっと甘くて、そのくせ酸っぱくて…。

あの時、夢中で串にむしゃぶりついたせいで、最後の一個はドブに落としちゃった。

母ちゃんがやめろと泣きそうな顔で言うから、拾わなかったけど…。

「親父、海鮮炒麺（ハイシェンジャオミエン）を二つ！」

飛び込んできた威勢の良い頼み声に胸が騒ぐ。

炒麺って、食べたことないや。

いっつも、この市場に来るたびに、よその人がチュルチュルおいしそうに
麺を啜るところを遠くから見るだけ…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0028z/

賊星《ナガレボシ》

2011年11月30日13時04分発行